幾重にも連なる山々に包まれるようにしてある集落。写真は立石地区から見た小田地区

特集

木を使うということ

―町産材の利用促進を目指して―

山が荒れている

山々に囲まれたまち、内子町。梅雨の季節を迎え、町全体が一層鮮やかな緑色に包まれています。私たちは、遠い祖先の代から山と関わり、その恵みを受けながら生活してきました。

しかし今、山道を通ってみると、あちらこちらで昨冬の大雪で倒れたままの木や、茶色く枯れた木を見かけます。林業の衰退が言われて久しい現在、多くの人が町内の山が荒れていることを実感しているのではないでしょうか。

国内外で、森林を守る動き

もちろん、山の荒廃は内子町だけに限った問題ではありません。すでに日本だけでなく、世界中で森林を守る取り組みが進められています。

今年は、国連総会の決議に基づく「国際森林年」です。国際森林年は、世界中の森林の持続可能な経営・保全の重要性に対する認識を高めることを目的として定められました。日本は「森を歩く」をテーマに、「未来に向かって日本の森林を生かそう」「森林・林業再生元年」を合言葉に掲げて、積極的な活動を行う予定です。

また21年12月には農林水産省が「森林・林業再生プラン」を策定し、10年後の木材自給率50%以上を目指した体制づくりを推進しています。

私たちもいま一度、身近な山に目を向けましょう。

2011.6.1
Vol.154

広報うちこ
UCHIKO

CONTENTS
目次

2　木を使うということ
―町産材の利用促進を目指して

10　まちのニュース
22年度内子ふるさと応援寄付金／旧小田町役場跡地に記念碑完成／ドイツ総領事が内子町を訪問　ほか

12　うちこ往来
うちこ自然浴ツアー／まちづくりフォーラム／いかざき大凧合戦／2011春の小田深山せんの森の日　ほか

14　みんなのひろば
リレーエッセイ／はじめてのバースデー／人☆キラリ　ほか

18　ゆうてぃあ　Vol.122

20　議会だより　第44号

22　農業委員さんを紹介します

25　町からのお知らせ
23年度「気軽に文化講座in内子」を開講／教科書展示会のご案内／「ベビー水中運動」教室参加者募集　ほか

26　くらしの情報
狩猟免許試験（初心者）予備講習／地デジの無料電話相談コーナーを設置／「FLAMENCO曽根崎心中」内子座公演　ほか

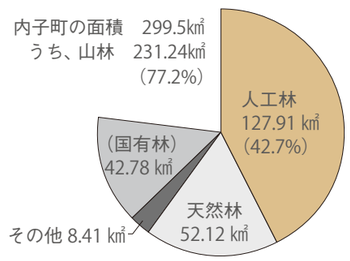
28　住人十色

表紙写真：枝打ちや間伐が行き届き、明るい日差しが差し込む森岡信利（のぶとし）さん（森）の25年生の白スギ林

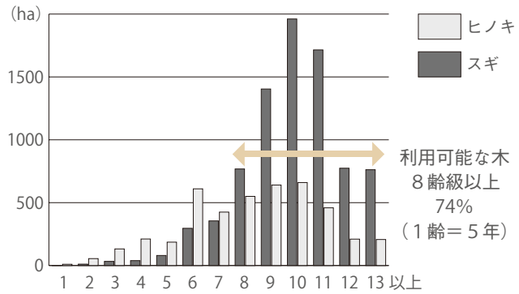
木を使うことで山が守られる

内子町の山の現状を、知っていますか。山は、林業に携わる人たちだけでなく、私たち一人一人の暮らしに深く結びついています。山を守るためにできることとは…

■内子町の森林面積

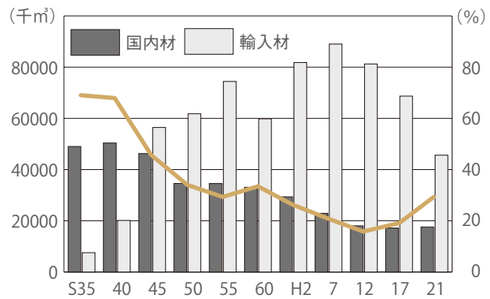


■内子町の樹齢別構成面積　人工林



［産業振興課調べ　平成22年4月現在］

■木材供給量（用材）と自給率の推移　全国



［林野庁　「木材需給表」］

■成長量に対する供給量の割合（全国・平成20年）

［林野庁　「森林・林業基本計画」「木材需給表」］

町の面積の4割が人工林

内子町は、町の面積の80パーセント近くを山林が占めています。人工林は42.7パーセントで、主にスギとヒノキが育てられています。愛媛県全体の人工林ではヒノキの育成が45パーセントと最も多く、次いでスギが44パーセントとなっていますが、内子町ではスギが圧倒的に多いのが特徴です。

利用可能な木が7割以上

人の手で植えた木が建築などに使えるようになるまでには、約40年かかるといわれます。町内の人工林の多くは戦後に植林されたもので、約7割が利用可能な時期を迎えています。

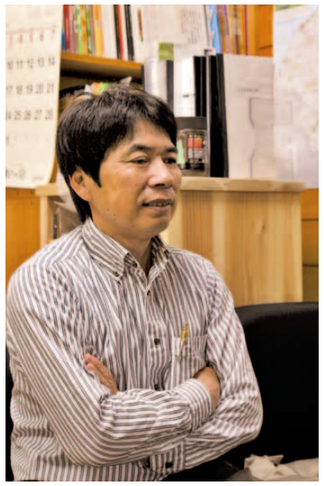
需要と供給のアンバランス

しかし実際には、国内材の需要は少なく、輸入材の方が多く利用されています。これは、大規模で合理的な林業経営が可能な外国からは、一定の品質の木材を大量かつ安定的に仕入れることができ、利用する側にとって便利なことなどが理由です。近年は輸入量がやや減ってきているものの、21年の国内材の自給率は27.8パーセントにとどまっています。

山の高齢化

一方、日本の森林資源の成長量は年間約8000万㎥。そのうち、国内材の供給量は1900万㎥で、成長量の4分の1から5分の1しかありません。

人工林は、成長した木を伐採し、その後にまた新たな苗木を育てることで循環します。しかし成長した木が利用されないままでずっと残っていると、山の高齢化が進むことになります。



需要増加のためにも、今こそ手入れが必要

㈱西渕工務店代表取締役　西渕菊寿（きくとし）さん

７年ほど前から輸入材をすべてなくし、四国産の木材を使用して、地元職人の手で建てる「地産地消」の家づくりを行っています。日本の木材は画一的な輸入材と違ってクセがあり、扱いにくいのですが、逆にそれを生かして使いこなしてきた職人の技術があります。地産地消によって、「物」だけでなく、それらの「人財」や「技」も大切に受け継いでいきたいと考えています。

しかし今、町内の山の多くは手入れがされておらず、私たちが求める木材がなかなか手に入らない状況です。手遅れにならないうちに、今こそきちんと山の手入れを行い、良材を育てることが町産材の需要を増やすために重要だと思います。

㊤長い間手入れされていない山。下草が育たず、竹が浸食している
㊦大雨によって土砂崩れをおこした人工林（水地地区・平成16年）

山を守ることは、地域の環境を守ること

荒れた山は、環境面でもさまざまな悪影響を及ぼすことが知られています。その一つは、保水力の低下などによる土砂災害の増加です。手入れされないまま放置された山は、木々が密集して光が地面まで届かないため下草が生えず、土がむきだしの状態になります。そのため大雨が降ると水を蓄えておくことができず、土砂崩れや河川の氾濫などの危険性が高まるのです。町内でも近年、大規模な土砂災害が発生しています。

一方で、少雨時の渇水や、河床への土砂の堆積などにも影響を与えています。

この他、動植物の多様な生態系の保全、地球温暖化の緩和、環境学習やリフレッシュの場など、山は多面的な機能を持っています。

山を守ることは、林業などに携わる人たちだけの問題ではなく、私たちが暮らす地域全体の環境を守ること。一人一人がその認識を持って山と向き合っていく必要があります。

木を使い、山を生かす

いま多くの山が荒れているのは、需要が少ないために、せっかく育てた木を伐採して出荷しても採算が合わず、多くの林家が経営が成り立たなくなって山を離れ、手入れが行き届かなくなったためです。

この現状を改善し、内子町の山を守っていくためにも、私たちの身近にある木材の利用促進を図ることが大きな課題となっています。

最も木を使うのは木造の家を建てること

現在、すべての木材需要量のうち7割は住宅としての需要です。ということは、町内産の木材を使った家が多く建てられるようになれば、地域の山を守るためにより効果があります。しかし家を建てることは一生に一度あるかないかの大仕事。それだけの魅力がなければ、使いたいという気持ちにはなりません。

木を使うことには、どのような魅力があるのでしょうか。

気候・風土にあった家

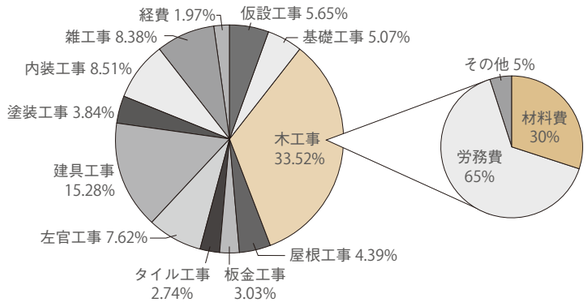
地域で育った木材を使い、地域で受け継がれてきた工法や技術を用いて家を建てることで、その土地の気候・風土に合った家づくりができます。

さらに木材ならではのさまざまな特性は、住宅に適した素材として再評価されています。

- □湿気を吸収・放出し、ほどよい湿度に調節する
- □熱を伝えにくく、暖かさを保つ
- □木材の表面は光を拡散し、反射を抑えるため、目に優しい
- □音を適度に吸収し、まろやかで聞きやすい音にする

木造住宅の建築費

木造住宅を建てる場合、木材代が高いと思われがちですが、一般的な住宅（33坪）の木工事は全体の33パーセント、うち木材の材料代は25～35パーセントで、工事費全体の8～11パーセントとなっています。

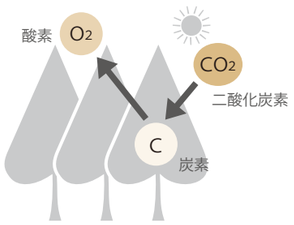


［資料：㈶日本木材総合情報センター］

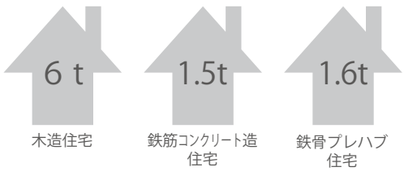
地球温暖化の防止効果

木は、地球温暖化の主な原因である二酸化炭素（CO_2）を大気中から取り込み、炭素（C）として体内に蓄えます。蓄えられた炭素は、木材となってもそのまま内部にとどまるため、木造住宅は第二の森林の役割を果たします。

また、木は若い間に最も多くの二酸化炭素を吸収するため、成長した木を伐採して新たに苗を育てることで、より多くの二酸化炭素を吸収することができます。



■住宅中に蓄えられる炭素量（床面積136㎡）



［出典：『えひめ「木」のいえ　住み継ぐ家』（愛媛県産材住宅モデル展示協議会・愛媛県林材業振興会議発行）］

「木材を使うということ」への意識を

愛媛県南予地方局産業経済部八幡浜支局
大洲森林林業振興班　主席普及指導員
佐々木秀和（ひでかず）さん

木材を使うことには、大きく三つの意義があります。

一、環境を守る

今、多くの山は手入れが行き届かず、荒れた状態です。木を使うことで、山はきれいになります。土砂災害などを防ぐだけでなく、川の水、海の恵み、周辺に暮らす私たちの生活など、すべての環境に連鎖的に良い影響がもたらされます。

二、地域を活性化する

例えば家を1軒建てるためには、木を育てる人・切り出して製材する人・大工さん・左官さん・内装業者など、多くの人が関わります。地域の木材を、地域内で積極的に利用することによって、産業が活性化し、雇用の創出にもつながるでしょう。

そこにある資源＝木材を活用することは、町を元気にする有効な手段の一つです。

三、心身を健康にする

「木の温もり」などとよく言いますが、木には自然素材ならではの味わいや良さがあります。また有害物質を含まず、湿気を吸収するなどの特性から、健康にも良いとされています。

さらに木造の家で、木に触れながら暮らしていると、自然とのつながりや、古来から受け継がれてきた日本の木の文化などを肌で感じることができます。

このことから、近年は子育てや教育の面でも、木の良さが見直されています。

戦後、日本では木を育てることに力を注いできました。これからは、生長した木を使いながら、自然の循環を保つことが必要です。そのために、県や各市町ではさまざまな取り組みを行っています。これらをきっかけに、地域の木材を1本でも多く使ってほしいと思います。

地域の木材利用推進のための取り組み　―愛媛県―

えひめ材の家づくり促進支援事業

県産材を使用して木造住宅を新築する人に、県産の柱材80本（約1棟分）を無償提供します。（上限184,000円）

愛媛県地域材利用木造住宅建設促進資金利子補給金交付制度

住宅ローンの返済で支払った5年間の利子の一部が戻ってきます。（指定金融機関融資を受ける場合）

「えひめ地域材の家」建設推進事業

住宅ローンの金利が優遇されます（協定金融機関）

◎愛媛県林材業振興会議（「木と暮らしの相談窓口」）
☎089（941）0165

―内子町―

内子町産材利用木造住宅の建築促進事業

内子町産材を使用して木造住宅を新築する人に、主要部材1㎥につき28,000円を補助します。（上限70万円）

◎対象となる住宅
(1)町内で、在来工法（軸組工法）で新築される一戸建て住宅で、延べ床面積が66㎡以上である住宅
(2)柱材など主要部材の70%以上に町産材を使用し、町内の製材所、工務店、大工などを利用して建てる住宅
(3)「内子町景観まちづくり条例」に適合し、屋根を日本瓦ぶきとする住宅

◎内子町役場産業振興課　林業振興係（内子分庁内）
☎0893（44）2123

内子の木、使っています

町内では、補助制度を利用して21～22年度に15軒の町産材を使った木造住宅が建てられました。利用者の声を紹介します。

延べ床面積　109.2㎡
町産材の使用量　19.51㎥
町産材の種類　スギ・ヒノキ
使用率（主要部材）　100%

○施主　土井好幸（よしゆき）さん　（富中）
長男家族　将志（まさし）さん、真由美（まゆみ）さん、勝揮（かつき）くん

子どもの頃からずっと木造の家で暮らしてきたので、新しく家を建てるときも木造の家にしたいと考えていました。また、祖父や父が代々育ててきてくれた山があり、その木を使いたいという思いがありました。今の時代では輸入した木材を買う方が費用が安い場合もありますが、将来のためを思って山の手入れをしてくれた祖父たちの思いを継ぐことができて良かったと思っています。新しい家で、今は息子家族が生活しています。

○施主　大森昭男（あきお）さん
妻　美代子（みよこ）さん　（亀ヶ谷）

家のたたずまいや生活面での「落ち着き」を大切にしたいと、昔ながらの日本家屋を希望していました。そんなときに広報紙で補助制度のことを知り、建設会社に相談して町産材を利用することにしました。

建設会社も製材所もすべて地元業者にお世話になりましたが、社長さんや従業員さんに「利用してくれてありがとう」と声を掛けてもらったり、棟上げには大勢の地域の皆さんに集まっていただいたりして、とてもうれしく思っています。せっかく内子町には山があり、林家も多いのですから、町産材を利用することで少しでも環境保全や林業の活性化などに役立てばと願っています。

延べ床面積　117.32㎡
町産材の使用量　20.25㎥
町産材の種類　スギ・ヒノキ
使用率（主要部材）　100%

愛情と、誇りを持って使ってもらえる木を育てています

林家　奥田義一（よしかず）さん　71歳（道徳）

「山が好きで好きでたまらん」という奥田義一さん。若い頃は栗の生産などもを手掛けていましたが、40歳ごろから「山一筋でやっていこう」と決心。おじいさんの代から受け継いだ12㌶ほどの山を、今は55㌶にまで増やし、スギやヒノキを育てています。

当初は、木材の価格が下がり始めていた時期。でも奥田さんは、「まだ育てる段階だったから、あまり気にしてなかった」といいます。それから30年間。5年、10年単位で計画を立て、植林、下草刈り、生育の悪い木の除伐や間伐、枝打ち、伐採、出荷と、すべての作業を一人でこつこつと続けてきました。

「林業で生活していくのは厳しいと言われるけれど、自分は今までやってこられたし、これからもやっていく自信がある」と話す奥田さん。「時代によって求められる材も変わる。良い木を育てれば、今も需要はある。どうやって使ってもらえる木材を作るか、林家も努力をしなければ」。そう言って、今日も山へと出かけていきます。